果物や野菜のアレルギー症状

花粉との関連知って

今治で実態調査 6割「認識なし」

専門医「回避」促す

花粉症患者がモモやキウイフルーツといった特定の果物や野菜を生で食べたときに、耳、喉、唇にかゆみや腫れなどの口腔（こうくう）アレルギー症状が出る「花粉・食物アレルギー症候群（PFAS）」。近年増加しているとされ、県内の専門医が今治市で実態を調査。約6割が、自覚症状があっても診察を受けたことがないことが分かり、PFASの認知度向上と対策を訴えている。

（梅林恭子）

調査を実施したのは、愛媛生協病院（松山市）名誉院長の有田孝司医師（64）＝小児科・アレルギー科部長。2018年6月、PFASの原因となる花粉を飛散する樹木の一つ「オオバヤシャブシ」が群生する今治市の小中学生と保護者にアンケートで協力を求めた。花粉症の自覚の有無▽果物や野菜を食べた際の症状の有無▽原因として考えられる食品▽受診歴―などについて約2万2千人から回答を得て、今年3月1日発行の「愛媛医学」で発表した。

調査結果によると、花粉症を自覚する児童・生徒は4324人（44・8％）、保護者は6047人（49・2％）。また、食品によって口腔アレルギー症状を感じる人は計1931人おり、中でも同市島しょ部と沿岸部の中学校区では、花粉症の人の20％以上が口腔症状も自覚。有田医師は「オオバヤシャブシは低山帯や沿岸部に広く分布しているため、関連性があるかもしれない」とみる。

アレルギー科を掲げている耳鼻科や小児科で血液検査をすると、原因となる花粉が分かる。ただアンケートでは、症状を自覚していても病院を受診しておらず、そもそも病気という認識もない人が約6割にのぼった。「本人や地域の医師たちが気付かないうちに、PFAS患者が静かに増えているのではないか」と危機感を持つ。

中には10食品以上で症状を感じている人も。PFASは、アレルギーの原因となる花粉抗原という物質の構造と、果物や野菜、豆類に含まれる異なるタンパク質に共通の構造が存在することで、抗体が結合して反応が起こり、症状につながる。花粉と食品の組み合わせは地域に飛散する花粉の種類によって異なり、加熱など加工すれば食べられるようになる場合もある。

オオバヤシャブシの花粉の飛散は、3月中とされている。有田医師は「飛散距離はスギやヒノキに比べて短く、約5キロ先までと局地的。まずはアレルギーを自覚し、原因となる花粉をたくさん吸入しないよう時期や場所に気を付けて回避することが重要」と強調した。

アレルギーを引き起こす成分が似ている花粉と食品

花粉	果物・野菜など
■カバノキ科 シラカンバ ハンノキ オオバヤシャブシ	バラ科（リンゴ、西洋ナシ、サクランボ、モモ、スモモ、アンズ、アーモンド） セリ科（セロリ、ニンジン） ナス科（ジャガイモ） マメ科（大豆、ピーナツ） マタタビ科（キウイフルーツ） カバノキ科（ヘーゼルナッツ） ウルシ科（マンゴー） シシトウガラシ …など
■ヒノキ科 スギ	ナス科（トマト）
■イネ科	ウリ科（メロン、スイカ） ナス科（トマト、ジャガイモ） マタタビ科（キウイフルーツ） ミカン科（オレンジ） マメ科（ピーナツ） …など
■キク科 ヨモギ	セリ科（セロリ、ニンジン） ウルシ科（マンゴー） スパイス …など
■キク科 ブタクサ	ウリ科（メロン、スイカ、カンタローブ、ズッキーニ、キュウリ） バショウ科（バナナ） …など

日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員会作成
（診療ガイドライン2016ダイジェスト版を一部改変）

「オオバヤシャブシは3月中、スギは2月中旬から3月末、ヒノキは3月下旬から4月末に花粉が飛散する。回避行動はアレルギー対策につながる」と話す有田孝司医師

オオバヤシャブシ

県内 広範囲で群生

他県で植え替え事例も

オオバヤシャブシは日本固有種で明治時代から広く植栽され、道路建設や宅地造成による荒廃地や草地ののり面の緑化などに用いられてきた。有田孝司医師の現地調査では、今治市のほか、東中予の公園や松山自動車道ののり面など県内の広範囲でオオバヤシャブシの群生が確認されている。

有田医師によると、兵庫県宝塚市では1990年代に自治組織と自治体が協力し約2万本のオオバヤシャブシを伐採し、斜面を保護できる樹木に植え替えたところ、住民に症状の軽快がみられた例がある。「今植えられているオオバヤシャブシにも役割があるので、単に伐採したらいいというわけではない。花粉が飛散しにくい他の樹木に替えることができれば環境が変わり、住民の体質改善にもつながるはず」と説く。

北海道や兵庫県では、オオバヤシャブシを含むカバノキ科の花粉症患者の2～4割程度に症状が出ているというデータもあり、イネやブタクサに比べて多くの食物との関連性が指摘されている。

アレルギーの研究に関わって35年。オオバヤシャブシへのアプローチは、2016年に豆乳を用いたホットケーキを食べてアレルギー症状が出た男児を診察し、それまで注目していなかった花粉との関連に気付いたのがきっかけ。今回のアンケートでも、カバノキ科の花粉と反応するバラ科のモモ、リンゴ、ビワで口腔症状を示すものが目立った。「今治市だけでなく、県内全域で行政や関係機関が連携し、調査、研究、対策を検討する体制確立を目指したい」。そのために、「アレルギーそのものと、PFASを引き起こしやすい樹木オオバヤシャブシについて広く知ってほしい」と地道に呼びかけを続けている。

花粉を飛散するオオバヤシャブシ。左（上下とも）は2017年3月、今治市吉海町で、右は18年3月、同市大三島町で、有田医師が撮影。道路沿いのほか、池の周囲や学校近くでも群生を確認している（提供写真）